蝦夷風俗彙纂前編

八

ヲ6
460
8

門 ヲ呂 6
號 460
卷 ハ8

蝦夷風俗彙纂前編卷八目次

○衣服

總說并製法
十字形縫の事
尾花帽子ハ事
耳環を用る差別の事
鳥の啄戎飾と成る事
エキシボの事
唐太夷女布をおる事
唐太衣服ハ事

タライカ衣服の事
スメングル衣服ハ事
蝦夷紫の事
○飲食
飲食ハ事
蝦夷醸酒の事
蝦夷酒を振舞の事
蝦夷酒と煙草茂好ハ事
粟酒の事
粟并トレフ團子の事

○食料とゝ成る草木の事
椎茸の事
蝦夷呑湯ハ事
鹿骨より肉を得るの事
附班杖根天南星の事
寄鯨の事
キナボウ魚ハ事
ウルツフ魚の事
インスベイベ魚の事
ムイ貝の事

ルイベの事
干數子の事
食土の事
唐太飲食ハ事
寒防ヨ煙草を吸の事
滿州人煙草ハ好ハ事
飲水の事
蕗葉等ヨて飯を焚事
葉椀の事

○藥餌

醫藥の事
藥草の事
カウリ、鳥并藥草ハ事
蝋蛄の事
カモイハシユイの事
トケ魚の事
鮭脊腸の事
夏坊主ハ事
製毒の事

蝦夷風俗彙纂前編卷八目次終

蝦夷風俗彙纂前編卷八

○衣服

○總説并製法

凡夷人ハ服ヒ𪜈るものの九種ヿ有ル。一をヂツトクといひ。二をシャランベといひ。三をチミップといひ。四をアツトシといひ。五をイタラッペといひ。六をモウウリといひ。七をウリといひ。八をラプリといひ。九をケラといふ。ジチトクといへるハ。其品二種ヿ有り。一種ハ

本邦よりわたる處はものゝて錦繡をもて製し。このゝち陣羽織ゝ類したるもはなり。一種も同じく錦繡ゝて製し。かたち胴服ゝ類したるもはあり。夷人は言傳へも。極北は地サンタンといふ處の土人。唐太嶋ゝ携來て。獸皮等の物と交易もるよしをいへゝ。則ち今本邦は俗ゝ蝦夷錦といふもは是あり。二種は中本邦より渡る所はものハ多くして。サンタンより來さるといふものゝもくあしと出るべし。シャランベといへるも。本邦よゝ渡る處はものゝて古き絹の服なり。チミツプといへるも。おゝあじく本邦よゝ渡る所は古き

木綿は服なり。此三種は服もいづも其地ゝ産せざる物ゝて。得がゝき品故。殊の外ゝ重んじ。禮式は時の裝束ともいふべきさまゝなし置き。鬼神祭祀の盛禮ち。ゆるゝも本邦官役人ゝ。初めて謁見もる等は時ゝのみ服用して。尋常は事ゝ用ふる事もあらぜ。其中殊ゝジツトクとシヤランベは二種も。其品も美麗なるをもく。尤上品は衣ともる事なり。アツトシ。イタラツペ。モウウリ。ウリ。ラプリ。ケラ。此六種は衣もいづれも夷人は製もる處のもはなり。そのうちモウウリも。水豹の皮ゝて造もしをいひ。ウリも。熊は皮又鹿狐皮ゝて

造りしをいひ。ラプリも鳥に羽にて造りし裁いひ。ケラも草にて造りし裁いふ。この四種もいづれも下品に衣とし。禮服等にも用ふる事を堅く禁ぜるあり。たゞアットシ。イタラッペに二種も。夷人に製せるうちにて。殊に上品に衣とは。其製せるさまも本邦機杼に業とひとしき事にて。心を盡し力を致せる事尤甚し。此二種にうちにも。ワけてアットシの方を重んぜる事にて。夷地おしなべて男女共に平日に服用せり。前にも記せるせし鬼神祭祀に時。ゐる人貴人謁見に時等の禮式に。ジットク。シャランペ。チミップ。三種の衣なきも

に也。みなアットシのみを服用せる事なり。其外に鳥羽獸皮等にて製せし衣も。堅く禁斷して服せる事を許さゞ。

凡そ衣服の内。機杼より出たるをは尊み。鳥獸の羽皮等にて製したるを賤しみ。且禮式ともいふべき時に服用せる故に。製禁を設置く事など。邊避未開に地にゐまても。いらにも尊ぶへき事なり。其左衽せるをもて。戎狄の屬といへん事。甚以て然るべからず。教といふ事なき地なれば。其人ゞら小兒と異なる事なし。左手に便なるものも左衽し。右手に

便ふるものゝ右衽せるなるべし。もべて蝦夷ハう
ち稀ゝゝ。誰れ教るゝまもならびして。右衽せるもの
もあるなり。もし教化ハ時ゝ開化せんゝハ。靡然と
して。本邦ハ人物とならむ事。何ハ疑ふなるべき。
右九種ハ服のうち。其上下ハ品もうちたる事かくハ
如し。今此書ゝ其製しらゝを録せんとせるゝ。九種ハ
うち。ジツトクゝ蝦夷錦と稱して。本邦ハ人熟知せる
處ハ物。シヤランベ。チミツプハ二種ゝ。則本邦ハ服な
るをもて。此三種の衣ゝいぶきも略せ。モウウリ。ウリ。
ラプリ。ケラ四種ハものゝ。いづきも鳥羽獸皮等ゝて

造きる事故。其製し方ハ始終本末。子細ハ此下ゝ録せ
るなり。イタラツペといふもアツトシと同じ物故。是
又委敷録せべき理なりといへども。此衣ゝ夷地ハう
ち南方ハ地等ゝてハ。造ゝ用る者甚せくなくして。ひ
とり北地の夷人ハゝ稀ゝ製せる事故。其製せるさま
詳ならぬ事ども多し。ゝらきぢも其製せるゝ用る糸
ゝ。夷語ゝモヲセ。イニハ。イムン。ハイクツウといふる
四種ハ草茎。日ゝ晒し糸となして織事故。其製方ハ始
末。全くアツトシと異ならざるよしをいへ。茲茎も
て此書ゝゝ。唯アツトシハ製しのゝみを録して。イ

タラツペハこのこを略せるなり。アツトシ製せるまハ。夷語まオヒウといへる木ハ皮ハ剥て。それを糸とな
し織事なり。まゝツキシャニといへる木ハ皮を用る事ハ遠ども。衣まなしたる處輭弱まして。久しく服用
せるま堪ざる故。多くこをオヒウハ皮のみを用る事な
り。山中より剥來ゑし儘ハオヒウハ皮を。則アツカプ
と稱せる事こを。ゑべてアツトシま織る木ハ皮をさし
てアツといひ。カプこをたゞハ木ハ皮ハ事まて。アツハ
木ハ皮といふ事なり。此オヒウといへる木こを。海邊の
山ませくなくして。多く深山窮谷ハ中まなり。夷人是

を尋求る事。尤艱難ハわざとせゑ。專ら嚴冬積雪ハ
頃まを至りて。山中ハ逕路悉く埋れ。高低崎嶇たる處も
平まなり。歩行なしやすき時をまちて深山まを入ゑ。幾
日とおく山中まを日を重ねて尋る事なゑ。其外夷人男
女とも平日何事まはきても。山中まを入る事なれバ。い
はも心まをつけて。此木を尋るをもて其習ひとし。若た
ゞ求てその木を得るとき。こを悉くまを皮を剥てそハ鹿
皮を去ゑ。中ハ糸筋ハ通りよき處を撰ミ取るなり。
オヒウハ皮こを。表皮殘さり指をもて幾つまもさく
とき。こを麻ハ如くまさくるもハなり。

是を糸になさんとせるに。其儘にても皮堅くして。糸にあしかるべき故。温泉にひさして和らにする事なり。剥來るしオヒウは皮を糸にあさんとして。先温泉に持行て。淺瀬に皮を漚し。上に木枝乘せ流れざるゆうにおし。日数四五日もはゝ者置。其皮はよく和らになるを待て。温泉より出し。湯はたらをとくと洗ひ落して日に曬し。是をアツヲンといふ。アツもアツトシを織る木は皮をいひ。ヲンも和らになる事をいひて。アツ和らになるといふ事なり。かくは如く温泉にひさし日にさらして。糸にさく計てもなしたるをいはれは夷人も力は及ぶ限ても貯置事。糧食の備をなし置とは異なる事なし。其皮を和らにさんとせるに。若温泉なき地にても。已事を得ば。池沼等に漚ぬ事もあれども。皮は和らぎがたき故。多くは是をなさば。遠方は地といへども。必ず温泉の有處に持行てひたすらなり。其辛苦せる事思ひもうるべし。凡て皮を剥ぎたるはむるに。是までは男女はわのちなくとも〳〵になすといへども。糸にはくるに後は事は。女子はわざに限れり。又アフンカルといへるハ。アフンは糸をいひ。カルは造る義にて。糸は造るといふ事な

り。是を前ゐいふ如く。アツの皮をよく〳〵和のゐなしてよゐ。麻を績もる如く。いくゐもさきて次第ゐ繋ぎ。岐頭(マタガシラ)ゑ木ゐ巻ゆくるなり。さあごら奥羽ゑ兩國ゐて。志那太布を織る糸を績む事と異る事なし。志那太布といふも。志那といへる木ゑ皮ゐて織しものなり。是も奥羽ゑ民家ゐて。此布をもて衣ゐ製し。農務及び力戎勞もる業をゐ時ゐ。服もるものなり。とりもなほさず。今蝦夷ゑ人服用もるアツシも。此製法を傳へたるもゑなるへし。

凡衣服戎製もる業ゑうち。此糸を績む事ゐがき事ゐて。日數を重ぬるゐならざれも然らざる故。晝夜ゑ分ちなく。聊ゑ暇ももておゐのもして勤るなり。時ゐ旅行もる事などならば。そゑアツの皮を持行て。夜〻投宿ゑ處。及び途中休息ゑ處ゐても是をなゐ。其業を勤のゐ〻ゐ純一ゐして。辛苦を顧みざる事憐ゐ堪へたり。

前ゐ記せし岐頭ゑ木ゐ糸を丸く巻付たるを。本邦の語ゐ玉といへ。それをカタキと稱もカタキもカタマキといへるを。略せるの言葉ゐしてカも糸をいひ。タマも玉をいひ。キも造る事をいひ。玉戎造るといふ

義なり。是よりてまづ糸を製せる此業も終れりとは。これより此糸をもて機に綜るに。カヽリケムといふ器械を用ふ。カヽリケムといふも。カリも糸をいひ。カリも卷をいひ。ケムも針をいふて。糸を卷針といふ事なり。是も前に出るせし如く。玉になし置たる糸筋卷て。本邦此機に梭子筋ともふぶせくに用ふるなり。その針と稱せる事も。其義解しがたし。其玉になしたる糸を機に綜るに。糸を一筋宛手に持て。いくたびも彼方是方へ往來して綜るなり。いくせぢも揃置て。一同に綜るといふ事も。たへてなさざる事なり。

糸筋綜る事とて。此ひてよりて。機を織るをアツトシカルといふ。アツトシも即ち製せるところの衣に名なりカルも造る事をいふて。アツトシを造るといふ義なり。まさアツトシタイキともいへり。シタイキといふも。なほ本邦に語ふう川といえんゲぶせし。アツトシをう川といふ事なり。本邦の語に綱條に類を組む事をうつといへり。其織事に子細も爰に盡し難き故略せ。

アツトシを織りあげたるをアツトシカルヲケといふ。ヲケも終る義にてアツトシ造る事終るといふ事

なり。其織てあげたるまゝのアットシを。ウセツアツトシといへてウセツを純色といふが如き事なり。織りかゝたるまゝにアットシといふ心なり。本邦に語る木綿に織てたるまゝにて。何の色にも染ざるを。白木綿といふが如し。アットシに織りかゝたるさま。下に方の幅を狹くなしたる事を。上に方を身衣となすべきにより故。幅を廣く織り。下に方を袖となすべきつもり故。幅を狹く織るなり。其身幅と袖巾とを織て分るさゝひを。トシヤトイと稱す。トシヤを袖をいひ。トイを切る事をいひて。袖を切るといふ事なり。亦衣

も製せる處に長短我。兼て着る人にたけをもつて定めて。少しに餘尺もなきようも織なり。

アットシを縫ふ事を。アットシウカウカといふ。ウカウカを縫ふ事をいひて。アットシを縫ふといふ事なり。是を前に記せるごとく。着る人に形によりて丈の長短をば。かゝてよりそかて定めて織る事故。衣を縫んとせればまづそじめに丈を定め置たる處より切て。又それを二つに切て。これを身衣となし。背に處を上よて下迄縫ひ通せをふり。それより肩に左右を二寸五分ほどに切て。其切し處を木綿にてもアットシにて

も。外はきれを入れて縫付るなり。其かさちまつ襟共いふべきぢ如し。也べてそれ縫ふといへるも。アットシは耳ど裁合せ。糸をもて巻さまよ縫ふ事なり。かくはごとくよ縫ふ事終りてより。背の處よ木綿は切迄をもて。種くはかさち裁刺繍也る事なり。前よ記せし如く。身衣裁切ヲ取りてその切ヲたるせおろよて。筒袖裁造るなり。おれ裁トシヤウカウカと稱也。トシヤも袖の事よて。袖を縫ふといふ事なり。夫より身衣を袖と裁縫合せ。脊は所よ刺繍は文をは爭。其外袖と裾との縁よもかざりをなして。衣は製全くとて〻はふなり。是裁アットシミアンベと稱也。ミも着る事をいひ。アンベハ物といふ事よて。アットシは着物といふ義あり。也べて此衣も夷人は平日服也るものあれども。他は獸皮鳥羽等よて製したる衣とも。格別よたゞひて。禮式は服のおとくよ尊ふ事なり。殊よ女子抔も時よより。下よ鳥羽獸皮は衣を着也る事なりてもいづれそは上よおのアットシ衣裁。本邦の俗よかいどりともいふべきさまよ打ゝけて着也。もしおのらぜして。唯鳥羽獸皮等は衣のみを着也るをバ。甚無禮也して。戒むる事あり。そは嚴密なる事。女子衣服は製度と

いふべし。たゞ女子はみゝふ非也。男子といへども。まさ
此衣裁尊み。官長は人は目見えれよび祭禮等。よろゞ
謹みは時ふ臨みてゝ。ジツトク。シヤランベは外。裝束
共いふべきものゝ。皆此アツトシを着用し。鳥羽獸皮
等は衣ゝかゝく禁止して。着用せる事なし。
水豹は皮を縫ひ合せて造れる衣裁モウウリを稱せ。
モウとゝふゝりなるゝは。一ツふあふゞ如くなる
事をいひて。本邦の語ふ諸共あぜいふゞおとし。されば
ば夷人ゝ夫婦は事をもモウといへ。ウリといふゝ
製は事なり。されゝ此製しろゝ外は裏と違ひて。前は

處みて左右は袵より下まで。ひしとぬひ合せ袋は如
く作りたるゆゑ。左右の袵一ツふあひたる裏といふ
心ふて。かくゝ稱せるなり。其形はたゞひゝる事ゝ。外
は裏と見合せて知べきなり。されゝ土人はうち。多く
女子は下着ふ用る事なり。
熊は皮其外鹿狐は類ひ。いづれは獸ふてゝ。其皮を用
ひて製せる衣をウリといふ。ウリとゝゝべて裏をさ
して稱せなり。ウリといふ其義解しがたし。
鳥は羽ふて製せる衣をゝべてラプリといふ。其造り
ゝさゝ。羽をとるふ皮をつゞてまるむきふおし。それ

をいく枚も縫ひ合せて造るなり。鵜ハ羽をもじめ。何鳥ハ羽ヨてつくれるも。其製しかゝも異なる事ホし。ホれをラプリと稱せる義ハ解しがゝし。

草茂あゝて造きる衣をケラといふなり。是も寒氣ハ強ク頃。風雪を去のがむためヨ。本邦ハ人の簑を用ふる如く着用せり。ケラと稱せる義ハ解しがゝし。蝦夷産業

圖說

割木皮代絲。質疏似葛布入水不破受雨不柔裁彩綿布刺繡成文其袖至窄長僅及膝名曰阿子記松前舟師多好着或紺綿絲疏織成柳條尤佳矣其它蟒綿衣係我邦及滿州故物。蝦夷風土記

蝦夷人ハ男女とも共ヨ襟を左ヨ合せるなり。本邦ヨても太古ハ皆襟茂左ヨヨみせし事ホりしゞ。養老三年ハ二月ヨ天下ハ百性をして襟茂右ヨなさしむといふ事見えたりと。又夷人ども衣服を一枚着て帯をホめ。其上ヨ一枚を着て帯をホめざるものなり。又頭ヨ鉢巻をホむるものなり。是ホも又古風ヨや。南留別志ヨも。田舍ハ女ハ木綿の單なる物を帯したる上ヨ着て禮服とせいヨし〳〵ハ小袿ヨどの遺れるホるべし。又鉢巻をもるを禮義とも。職人歌合ハ繪ヨども。

又能は狂言などもかゝる姿なり。民間は女の裝束なるべしといへり。かゝれば夷人どもゝ往古はさまは残れるゝやゝ。北海隨筆

一男女は衣服亦蝦夷嶋ゝひとしく。木皮布を製して服とゝもといへども。所謂オヒヤフラカツプ抔稱せるゝは。此邊ゝハ多く産せされば。以て嶋夷は服を成せゝ足らず。モーセと稱せる草皮を剥き取。水ゝ晒紡績して糸を製し布を造る。本邦の麻布はゞとし。是を名ゞけ者てテダラベといふ。此嶋は造ゝ出ゝ布帛は類。只此二種ゝ限る。木綿衣は類も服せと

いへども。悉く山丹夷は齎し來て交易せるとゝろゝ。は物。或ゝ本邦より送るとゝろゝして。地産はものゝゝもゝからば。其他ゝ魚獸皮を以て。滿州服は製を模製し是殘服せと云。

一男夷ゝ異ゝたる盛飾は服なし。女夷ゝ飾服飾帶を著用ゝ。皆山丹夷は齎し來る所は物ゝて。真鍮を以て製せし物なゝ。魚獸皮は衣といへども。大抵是殘ゝは者て飾とゝ。

一木皮布デタラベ共ゝ。其文繡蝦夷嶋ゝ異なる紅結藍錦ハ。悉く山丹夷は交易せる所はものなり。

一奥地に至るに從て。人物何となく南方諸島の夷と少異にして。其顔色容貌自然に殊俗の夷風を移せり。故に冬月の頃。犬皮の衣裁服し。水豹のケリ（履の類松前方言からはをはき。熊皮の頭巾を蒙りたる樣なり。異俗の者と伺やしむきと多しと云。

一極寒の地たるゆゑに。嶋夷少長となく。魚獸皮を以て脚衣履襪を製し著り。蝦夷嶋徒跣の夷のおとき
に伺らず。故に其俗一般の異狀ありと云。（北蝦夷圖說）

蝦夷嶋は。夫逸して婦勤むるの俗にして。其身の衣服
をいふに及ぶに。其夫其子の服。皆一婦の織出るアッ

シ布なり。唐太嶋是に反しアッシ。デタレベの類伺りといへども。草木少數にして多く造るおと能ざれば。男女の衣服大抵交易ものを用るに。男夷勤て山獵をおし。我邦と山丹に交易して。其婦に衣せざるおと
を得ず。況其俗女を貴び。衣服まゝ色々の飾器を作る
おとなれば。夫勤め婦逸せる俗習にして。蝦夷嶋に反
する所なり。同上

蝦夷地の俗被髪文身。衣服も窄袖。長身刺繡をもて文飾し。耳に環を貫くを見るに。我ら日の本の俗を學ぶ所もいさゝかなし。昔孝德天皇五年。遣唐使蝦夷男女

二人をもつて。唐に天子に示せよしい。日本紀に見え。
また元史の日本傳に。後周の顯德中其國使。又領蝦夷
國人來貢。其人髭鬚長四五尺。蓋倭之屬國也とかり。顯
德は皇國村上天皇に天曆に末にあたりて。往古に斯
く唐土へも度々ゆきゝせしことなれば。彼に國に風
俗に習慣して。遂に衣服も刺繡を飾り。耳環なども用
ふるやうになりさるにやまた滿州に地にも近き者れ
ば。自然かに國の風に移りたることもかるべくおも
そるゝなり。嶺表録異中范石湖が舉る所に黎蠻にい
ふ。蠻皆椎髻跣足。挿銀銅錫釵。婦人加銅環耳墜垂肩。女
及笄即黥頰爲細花紋。謂之繡面女。とかれば。我蝦夷に
黥せるとに也。また繡面女に類ならん。東蝦夷夜話
夷女に肌着に筒袖にて。前にて縫ひ合せ囊にちしら
へ。裾より被りてきるなり。乳に子に其内へ入てに
ませる。いろに也窮屈に也ゆうに見も。ちられども肌膚
も決してからそさ不ば。斯に生るにとなるべし。同上

○十字形縫に事

長者に衣服も。凡俗に也のよりも長く。絹片を以て大
小に十字形を縫ひ成したり。其製絹或も綿布を以て
に。貧賤なるも也も。獸魚に皮革。或麤末なる綿布を用

ふ。予彼に向ひて如何なる故によりて。衣服皆十字形
を附くるやと問へば。答て曰。われ吾ら壯健を賀する
此章（シヤウ）ありといへり。尤往古より唯その十字形をのみ
用ふるゆへ。別に其義なるべけれども。彼等もらぶして
唯右に如く答へたるならん。野作雜記譯說

○尾花帽子に事

唐太に常服尾花帽子といへる。芒に穂もて作りし
ものなるべし。多くは羽州の最上邊より出。又キナホス
といへるは。奥羽にて蒲脚半と云て。木綿にてもて雪に
中凍合してなゆゑ惡く。又草深き所を越るにも。一日

も不保ぐ故に。多く此蒲にて作りしを用ふ。是も南部
領に沼宮内邊より出。其上品なるは馬に尾を以て作
る。雪中山を越るには甚よろしきものなり。唐太日誌

○耳環を用る差別に事

天鹽字トンベツホといふ處に人家二軒（アエトモ家内七人トキノチ家内六人）有。爰に召連しトセツに妻子も居りし故に宿
也。其子ホントセツ當年三歳なり。未ぞ耳環も入れば
有し故。此度鉛環を持來り挾遣ハしれるに。少も痛と
も云ハぬ悦び居るぐ。歸りに此頃に是を見れば。耳房
朶に程能く穴貫て環を通りたり。余も奇と思ひ其由

ゟ始ゟ銀環銅環を入るや痛ゟ堪ぢ。依て鉛環を挾み置ゟ。一月斗過れば穴貫るなり。其時ゟ何成共入替るよしなりと云しゟ思ひ當るしゟ。穿肉法者曲鉛條而夾耳之肉久則自通。以鉛能入也。物理小識と有。和名鈔釋名曰。穿耳施曰璫。とあるハ是なるゟ。天鹽日誌

○鳥ゟ啄を飾とぢる事

擇捉嶋ゟイトピリカといふ鳥ゟり。夷言ゟイトとゟ鼻。ピリカゟ美しきと云事ゟて。此鳥啄紅ゟして美しき鳥といふ事なり。此鳥三冬ゟ岩穴ゟ蟄し。初夏ゟ至り海濱ゟ出て。水上ゟ浮游し小魚を食とぢる。夜ゟ岩穴ゟ入て宿ぢる。此鳥高飛ぢる事ゟなくして。岩上高さ三四丈ゟ所を上下ぢるなり。夷人捕て肉を食し。啄を婦人ゟ服ゟ綴附て飾とぢる。羽毛を衣とゟし是をウリと稱といふ。松田氏四六筆記

○エキシボゟ事

男子女子共ゟ十四五歳まで迄。前髪ゟエキシボといつるゟゟを附たり。エキシボハいゝゟなる義ゟ。ならば。山靼渡ゟゟ青玉ゟ三四十許ゟ。三角形ゟ糸ゟて木綿ゟ綴ゟ附。是ゟ前髪ゟ下る。至極美しゟゟゟ也。唐太日誌

○唐太夷女布をゟる事

唐太夷女布を織るも。東地はアツシを織と異なり。機はた立ゆう粗本邦に似たり。モセトといへる蝦夷地にて網を作る草なり。其皮を取りて糸となし。布を織る之をユタルヘといふ。其模様もアツシは縫と少し異なり。邊要分界圖考

○唐太衣服の事

唐太にて織出す物をユタルベと云。其製もアイトと云草を川に漬て皮をむぎ糸にして織立るなり。下着に用ふるにハ犬の皮を着す。

アイトも石狩邊にて。モセトと云。漢名蓐麻はよし。

右ユタルベも袖より肩迄模様を縫付。ひざらしは毛皮右は糸より迄。蛇腹の様にふせ立る。其下に黒或も赤き木綿を伏せるなり。右唐木綿も山丹より渡来といふ。

唐太の女衣類も。蝦夷地と少し異なるよし。アザラシは皮にて裾を廣く仕立。紋の如く裾に皮を切ぬき。同皮の色に違ひたるを入縫附るといふ。常も皮にて拵。真鍮は如き金にて菊。或もうづ巻なとは如き金物を縫付るよし。其金具も山丹より渡来といふ。女は入墨も額頬及ひ口は端も。蝦夷地女の入墨より濃き方な

りといふ。休明光記附録

○タライカ衣服の事

寛政四年七月東部タライカ酋長イセリ交易の爲め。南部タナンナイより來る。其人物は唐太夷人に似て。皆獸皮を衣とす。ヱトピルカの皮にて製したる衣。又アザラシの皮にて製したる衣を着す。東夷チユフカの夷人も此に同じ。其衣の形ち稍異なり。腰に皮囊を佩て蝶鮫の皮を以て製す。鱗の文理異なり。其魚の名をウツクラチと云。言語も西部夷人と大に異なりと。邊要分界圖考

○スメレングル衣服の事

スメレングル婦人。日本人に替る事なし。髪も長髪にして三ツ打に組。二本下げ長き事。坐て地に餘れり。滿州櫛にて水を附て梳る也。耳に耳ら孫に玉類房等を長く下げ。服も唐木綿緋萠黄等の無地にて。小手袖裾も開き仕立にて。胸も鈕釦掛にして。裾には鍮石（トウセキ）にて。いろ〳〵の形を彫たる鋏物一寸間に附け。小玉を以て色分にして。七寶繋等に組みて胸にかけ。足には履をはき。紋形ゑ打出したる皮なり。縫めは鍮石鋏物にてメる。服も上帶なし。松田氏四六筆記

○蝦夷紫は事

蝦夷人は着せるアツシは。薄紫に染たるなり。是も何をもつて染さる物ぞと尋ねしに。宗谷領はうちチエトマヘといふ處に。プラシノといふもの有其實なり。プラシノも和名濱松といふもはなり。是を口中にてかみ碎き。アツシを染たるなりと云ふ。色合至て見事にて。矢張江戸紫は如し。則チエトマヘは澤山なり。東諺

俗話

○飲食

○飲食は事

都而蝦夷は食物も。魚類鯨油野菜。及玫瑰實は未熟緑色はもの等なり。其玫瑰最も厚岸に多し。夏月はれを採り。貯へて以て冬月は食とす。亦國中に生せる罌粟穀按に夷地産せる事をきかず及所獵は鳥類。皆彼等食物とせるものなり。其食残盛る器物は形圓なるなり。方なるなり。皆漆器なり。毎人別器に盛り。箸を用て食せなり。

按に凡西洋人も。食物を大皿に盛り。是残盆に載せて。皆集てされを分ち食せ。是別器に盛て一人毎に食ふと云ふも。西人は奇觀とせべし。故に爾り云ふなるべし。

海邊に於てヘイルボット。シカルレン

按に共に比目魚の類

松魚の類夥しく獵せ。國中アップルホーム

按に橘柚梨子杜類を云。然れとも夷地絶て所不産

ゲレーチボーム

按に瓣杜一種とあり。土人鯨油を取て。又魚類を岩石上に乾し。以て食用とす。

老若男女皆酒を嗜み。飯をトゞ杜油を雜一食ふ。但酒の瞑眩を止むとて。飲酒前後に食せず。野作雜記譯說

アマ、イベ。といへるあとは。アマ、は穀食をいひ。イ

べを喰ふ事をいひて。穀食を喰ふ事なり。夷人の食事多くは一日に兩度なり。若客等にありて夜に至る時なとは。三四度其餘にも及べる事なり。

但食せるの度數は。本邦のおとさきたしらに。定まりたるといふにはあらず。時によりてはかせる事もあるなり。

其食せるには。先そじめに汁それより粥を食せなり。粥を後に食せる事夷人は習俗にて。其意詳ならずといへども。殊に貴み重んぜるよりしてかくいはせ事あらん。それも本邦はおとさく。汁粥とも共に一同に烹置

て食せといふよりならば。まづ汁を烹て食しをえり。
夫よりまゝ粥を烹て食せなり。まれよりまゝ其ほと
よて。魚ぞうりを湯煮よりなして食せる事もほれども。
まゝ汁と粥とを日々の常食とせ。時よりてゝ汁
ぞうを残食し置事も有。粥計りを食し置ちとも有。ま
ゝなる時ゝ魚ぞうり食しわく時もほりを右三種の物
を食せるよいづれも一椀をもて限とせ。三種のもの
ゝ中。なるゝ二種。なるハ一種のもけを食せる時も。ま
た一椀づゝをもてかぎりとせなり。
これらの事ゝいろなる故よりかくゝ定めたりた

ん。三種をみれ次第して烹る時ハ。一種を一椀づゝ
喰ても。凡て三椀の食よほのさるべし。若三種のもけ
そなたらざらんよハ。なるゝ二椀なるハ一椀よ止
りて其饗歉ひとしからぬ事なるべきを。夷人けお
らひ。いさゝ。の是等の事をもて意となさゞる事と
みゆ。
一椀を喰ふごとよ。粥をアマヽトミカモイと唱へ。魚
肉及び汁をチエツプトミカモイと唱へて喰ふなり。
是ゝ右いづれけ食も。天地神明のたまもけよて。人の
身命を保つとおろのもけあれバ。それ〳〵よ主る神なの

る事故。其神を貴み拜ぶる社詞あるよし。魚汁ともよ同じくチエツプトミカモイと唱ふる事も。汁の實もいづれ魚肉を用ふる事其本よして。ラタネ及び草ハ。魚肉の助けなるゆゑ。魚肉を主となぶといふ意なり。

されのみよならず。凡て食ぶるほどの物ハ何よよらず。其物の名を上よとなへ。其のトミカモイと唱へて。食ぶる事夷人ハ習俗なり。

一日よ兩度づゝ食ぶるうち。朝の食ハ巳の刻より午刻よ至るなり。其故ゑ朝とく起て。先一般ハ業務をなして。それより朝の食事よつくなり。男女ともよ

なることなしたとへバ男子ゑ漁獵よ出れバ。女子も又家よ居りて。居つしよて。織などいふ如きの事なり。食事の時よ居ゑ。家ハ者他よ行て其坐よあらざれバ。先ゑぞらくゑか〳〵るをまち。若歸る事のたゝれバ。それ者の喰ふべき分を椀よ盛てそなへ置。それより皆食事をなぶ。亦食事の時外より人來る事居れバ。其人數ハ多少をいとハず。家ハ者とひとしく食をぶゝめ。ぶべて微少の食物といへども。我一人よて喰ふといふ事居ならぶ。其坐よあるほどの人よゑ。とぐく配分して喰ふ。おし至てゑづゝの物よて。配分

をべのらざるもれハ。其坐の中ゟて老人。ゐるひハ小
兒などゟゐのゝへて。一人ゟ食せしむる事もゐるなり。
老衰の夷。或ゝ重病等れ夷。住居近きゟありて。養ふべ
き人ゝなく。飲食心ゟまこのせざるもれゟゝ。食事のゝ
びごとゟ。かならぞ持行て喰れしむ。大ゟ漁獵等ゐり
しときハ。親類朋友をまねきて。本邦ゟて俗ゟ振舞な
どいふぞ如きれ事をなをこともゐり。遠方より旅人
來る事ゐれバ。幾日といふ事なく留置て。食事の中尤
夷人の美と愛をるもれを盡して。饗應をる事なども
あるゐり。是等をべて飲食れ事ゟつきて。夷人の性淳

朴ゟして。親愛深く交際和睦せる事をれもひたゐる
べし。蝦夷國志

アマヽラタネれ事ゝ。後編耕漁れ部ゟ詳なり。併せ
見るべし。

食料ゝ冬天山野ゟ鹿獵し。家内れ家根裏ゟ釣下げ置。
日〻爐火れ烟ゟて。自然れ薫肉とををゝ尤鹽を用ふる
さとなし。鮭肉ゝ多く日ゟ乾し。後前條れ如く家根裏
ゟ釣下げ貯蓄をゝ。焼百合れ類ゝ。臼ゟて搗碎き之れ日
ゟ乾をゝ。又有用の草を乾して貯置と雖ども。多く其季
節れもれを採集して食用ゟ供ゐ。蝦夷雜書

蝦夷地へ都て穀物は種を持渡る事停止なり。故に耕作は道をならば。是に由て田畑は名目をもならば。野菜栽物を不好。歟冬牛房山野に自然と生れども。蝦夷は土人も食する事をならば。只魚肉獸肉等を常食とす。蝦夷土人も都て食物を食ふに膳を用ひず。椀一箇に限る。汁菜は不用。味噌鹽なき故に。魚肉獸肉草根等。眞水にて煮て食す。適に海水を淡水に和して。鹽梅する事有るなり。食事をするも。食物は多く有る時も。終夜喰ひつゞけ。又食物はなきと雖も二日も食事せざる事なけれども敢て食物を欲する事なし。蝦夷草紙

飲酒以倒尊爲期。隨得飲盡。不爲後計。醉不堪杯酌者。注所餘酒於小尊中。持歸而與妻妾。其尊名曰革木。革木凡爲人所邀赴會飲者。必携一具將飲酒架。掲鬚匕杯。上左手把杯。右手執匕。染酒供之。左右上下祭畢而飲。其儀可觀。醉至耳熱。忽起舞。舞伎可觀。徒揚兩手。或一手拍胸。伎中有鶴舞。亦無佗狀。時作鶴聲。又唱詞曲。吹小簧以赴節。其音革和革和。言其名曰革。以下略　蝦夷風土記

些少は酒と雖ども。他人の傍にて一人飲む事なし。聊にても配分し共に飲むなり。

飲食を女子烹焚して器に盛り配與す。男子は一本は

箸は如きを以て其食物を天地神に供し終て食せ。女子もこを以て食せ。

他家にて食を受るに。先家主に向て通常は禮を行ひ終て食せ。食後銘〻は指にて其器を拭ひて家主へ返せ。但食事の順序。第一酒第二魚肉第三米。右一品づゝ飲食し。必ず雑食せず。蝦夷雑書　蝦夷記同

蝦夷食饌はおとゝ。はなぐ。おゐく魚類を食せ。是も漁に出さし網又もアチウカヽと稱せる。柄は長さ四間ぢのりある。槍は如きもの我以て海魚を突なり。海底ふの犯所も。接き柄をなして海底へはろし突なり。其得たる所は魚を。海水をもつて烹て食せ。貯置くにハ干魚となして圍ひ置おり。秋より冬も海上荒。漁獵なりがゝき故。夏中飯糧にはなせ草をとりて貯置おり。取たるとき直にも食せ。是も汐水にて烹て食せなり。右草飯糧に貯るにハ。根を能臼にてつきそこ。糟をハ堅めて餅となし。粉をハ水干して葛はおとく製し貯置なり。食せるにもこれを丸め。魚油にて煎て食せ。まゝ湯煎にして喰ふ事なり。飯糧に用ふる草。左はごとし。

トレツフ　和名姥百合

フイ

トマ　キトウ和名アイバカマ
ヘホロ　アンラコル和名黒百合
モシカルベ
以上根を用ふ
ハル和名シャク　キトウ
オモシコ和名マタヽビ
右の品をむかく用ふ其外
ウライハウシ漢名防風　シタマカヨ
ウベツ漢名當歸　キシシユ
ウヱムン漢名蘄　オラツフ

マカヨ　アワヽ
コルコニ漢名欵冬　イツラウプ
イマクトツ　フクサウラヽヒ
ノミキナフムン　イマウル
ベネツケシ　クツナハツ
ムケカン漢名桔梗　コサ
フンキカマフレツ和名蛇覆盆子（イチゴ）　チクムツ
ウヱンニフレツ和名イチゴ　マサルホツ
イコクワ漢名虎杖　フルカマナイ
カタム　イボプケフレフ

ウヱスミタンネアツトリ　フツポクシハル
イマキアネ　ホポ
アツケヘチ　ハラテツ
オロムタツ　ヘリコドンシ
ユクト　オウコノイチ
シンクツ

右の草いづれも手入せず。つくるといふ事なく。野山に自然と生ずる草にて。各食せるなり。夷諺俗話十勝字トンケシ。此邊りに岩椒多く生ぜり。其實を土人も喰し。又此實を以て榆皮を染るなり。東蝦夷日誌

擇捉嶋も。東蝦夷地かぎりの奥地にして。周廻凡二百六十里ばかり。かゝる廣くとしたる孤島に。蝦夷人もばらに男女を合せて七百餘人に過ぎず。乙名のもれにも。ゆうく熊アザラシ。ゐるひは犬の皮の類を着して。其餘のもれも鳥の羽を綴り。又もキナといふ草をとだゐりめて着し。ゐるひも又裸身なるもゐり。十五六歳より下の小兒どもも。極寒の時といへども總して赤裸なり。小屋もゐるうあきりの體にて。穴居同樣の有さまにて。朝夕の用器もなく。鍋一ツのみも。五軒六軒にて用る故に。常用をもなし難し。されば食

物よりする魚肉も。多くハ煮る事をなさずして燒てくらひ。或ハ生よりて喰なり。彼島より魚類も多くありといへども。これまで漁具といふものなくれバ。取る事ハさそび。鱒鮭ハ類ハ旬季もおくまて。海中をたゝれて川くよりのぼる頃などよりいたりてハ。たゞヤスといへる木ハ先へ。釘ハそぎものをはゝて。是ハもつて突とめ。銘〻少しハ魚を得て干かたらして。冬分ハ食料となし。猶又足ざる處をバ夏月よりいたりても。黒百合ハ根。ゆるひもキトヒルなどゝいふものハ採りて。多くハれを貯へ置て。四時とも是を食物とせされバ多くハ飢寒よりたへこの祢て。死亡せるもハも多ゝりもし。然るよ今數多ハ交易の行ハきて。衣食よ足りてたのしみを極むるのみならバ。又ハれ國益をなハ事莫大なりといふべし。續蝦夷草紙

○蝦夷釀酒の事

天鹽字オン子トといふ所の空屋よりて。醪を作らしむるよ。土人ハ法として。鹹草ハ乾たるを入。玄米よ麹を合せ甚手輕きもハなり。是則ち夷地有草名阿麻爾于。似白苣土當歸之類。又一種草似是而葉稍〻細如大麻葉。名侈耶區。三字合呼二草土人皆作蔬食。寛政癸丑歳。魯西

亞國舶送還我漂民其人多收去云作釀酒草麹之料蕃名宇伊哆羅玻譯曰酒草（近聞偶筆）と有もの なり又夷言ヨ麹をカンタチといへるゞ其時も心附ざりしヨ和名鈔ヨ麹（音菊和名加無太知）と有て皇國ハ古語ハ存せしもたふとしと云べし（天鹽日誌）

チシユキコといふ草平原曠野ヨ繁茂せ嘗試ヨ此味激甘酸夷人根を採ヨて米多く交へ蒸熟して糀とな し又外ヨ一種煑熟したるを製して麹と合せて酒を造る其味本邦ハ濁酒ヨひとしく醉を發せることハ又變事なし（蝦夷土産）

會所ヨて麹を製し濁酒を釀し置飲ませ或ハアイノ買ヨ來れば帳ヨ記し置賣遣し又アイノ自分ヨも米を買麹をも買ひ濁酒を造れども味ひ不宜よし米麹抔も價ハ皆仕切勘定ヨ相立るなり（松前秘說）

蝦夷地見聞録ヨ米を炊て食せる事ハ願ハざるヨハ ゐら祢ども いさそしやと云て酒ヨ造りて飲ことを第一ヨ願ふなり（千島志料）

○蝦夷酒を振舞の事

東遊記ヨ蝦夷人隣家ハ来まゐきて酒を振舞ことゐり夫の代ヨ婦人行事ゐれば宿より壺ゆうハ物ハ持

行。垣に掛置て。已も少ゝこのり飲。餘りも其壺に入置て家ぢとおい。同上

○蝦夷酒と煙草茂好む事

蝦夷に味噌なし。鹽氣をもとのまり食せず。魚油にて煮を最上とし。其外湯煮なり。近來も少ゝ鹽をも入るゝ事となり。其上寒氣の節にても。食して後に湯茶を飲まゞ水を飲なり。故に酒のめんをせゞ。酒盛といふも有なし。米麹なき時も。粟稗にても糀をおしらへ。濁酒を造るとなり。此濁酒も風味も甚よろしからざれゞも。酒と煙草も。困窮なる夷なゞに至てハたゞなき故。隨分と歡びたべるとかり。若廻舟延着にて煙草きれたる節も。骨茂きざみ。或もきせるのらう茂刻みやにをもなめる。誠に酒と煙草も兒童も嫌ふもの稀なり。

蝦夷土産

○粟酒の事

一ヶ年一兩度。乙名或も富德也者粟酒を造る。近郡より至る迄。老幼男女招き集め飲酒せしめ。其時乙名なるもの也。柳也削りたるを以て造りし輪也如きものを冠り躍る。他人立騷きなゞし終て。一統輪廻りに躍茂始む。男女互に飲酒せるもとゝ。晝夜歡茂盡事なり。之をカ

モイノミと云ふ。蝦夷雜書

○栗并トレフ團子の事

一統へ栗團子を作る振舞ふ。其作る方。栗を搗粉ふし てトレフ此粉蕎麥葉貝母を合せ搗。中ふ鮭の卵を入丸め。湯上せしむ此なり。我ふも其儘出せしが。土人等ふは是或魚油ふて揚て出したるふ味甚妙なり。十勝日誌

天鹽字チノミと云所ふやどれるふ。土人等家を掃除し。行器。貝桶。耳盥。太刀短刀等を餅る。

土人客を招くときも。種々此器を餅るなり。是内地ふて掛物を懸。花を生る此類なり。

鹿を屠る。胡女もトレフ此團子を出し饗す。其形楕圓形ふして。夷言ふシドキと云ふよし。粉を此形ふ作る。頗る古風ふして鍔の形なり。和名抄粢い粢餅なり。和名之度岐とあり。又餅米を蒸し熟して。すづのふつき鷄子此形の長きが如く造るなり。古書ふある其名も形も。夷地ふ殘るぞ不思議なり。天鹽日誌

○食料と成る草木此事

東夷物産誌ふ　シフキナ

一名チシライ。シコツノ方言ふシウキナといふ。濱防風又シブキナといふ。名同くして物異なり。松前

及津輕にて。おれ戎エリニウと呼ぶ。此則夷人專食して。倭人も食ざるゆゑなり。此又差活に一種にして。甚大なるものあり。其味辛苦にして臭氣あり。莖を斷ち白液を出す。其莖大なるも高さ丈餘。圍一握に充るなり。夷人或も截て矢筒に作り。又機織に具となす。節に隔たること三尺許。葉に長さ數尺。其根アマニウと共に。夷人莖戎取て生にて食し。或も皮を剥き日に干し貯ふ。

同書に　キイテン

是則草蘚にて。所〻山中に産す。虻田長万部邊に夷人根をとり乾し食用とす。

同書に　シコナハ

羊蹄なりシコナハも。シノハに訛謬せしみや。虻田に夷人。秋後其實を收取り。煮て粥となし食す。厚岸に産するもに極て肥大。葉に長さ三尺許。濶さ一尺五寸ばかり。夷人呼べてシコナハと云。

蝦夷物産誌に　決明

夷名メナシャル。松前方言にてキッネノマメと云。此草山野に多し。春芽を生して夏秋の交に至て。黄色に花を開く。秋實を拾ふ。夷人好て食す。此も犬

そら豆といふものはならんか。總して諸國とものゝ其物ゝ似て非なるものはを。犬といふ言葉をそへ。ゐるひゝ猿ゐるひハ狐などは言葉をそふる事なり。方言

考按ゝ此キツネノマメといふハ。莊逆明草なり。

同書ゝ　オバイロ

夷名キユー按ゝ此草正字未詳蝦夷地所〻ゝ多し。葉ゝ一莖つゝゝ生ずるものはまて。長さ五六寸ものゝるべし。根ゝ百合は如く。夷人等其根を取て燒食し。又煎て乾し固め。穴を穿ち爐上などゝ掛け置。冬分は食料とする時ゝ。細刻して鯡油などを入るゝよし。按ゝオバイロといふるゝ。百合ゝ似たる所ある故。大葉百合といふるを。約言せしならむか。

蝦夷草木志料ゝ　シトケ

一名モミチ草。本草ゝ云。思督郵は屬なり。陸奥土人其莖を食料とするゝ。まさべツツルゝていふシトケゝ。イハブキゝ似て莖茂擢て生ず。是同名異物なり。

東夷物産誌ゝ　エマウレ

此蛇苺なり。エマウレゝイチゴは事を總て云なり。釧路ゝてエマウレといふものゝ。蛇苺の一種。葉龍牙ゝ似たるものはなり。夷人實を採り食ず。七月熟ず

まゝ蔓延せるものなり。又山越内にてケシヤクと云物も。一種自生して高二三尺にはるものあり。

同書に　マウチクニ

瀬海の地に極て多し。此玫瑰なり。高二三尺に過ぎ。秋野に成林なり。高者丈餘圍尺許なるあり。夷人實を採て海水にて洗ひ食せ。

蝦夷物産誌に　虎杖

夷名シックヅ。イコクツ釋名曰。大蟲杖班杖酸杖李時珍曰。杖言其莖虎言其班也。並本草綱目和名伊太止里和漢三才圖繪虎杖も所によりて異名多し。サストリ

ともいひ。まゝイタドリともいひ。或もサイタツマともいふ云々。按に虎杖も早春芽茎生るに。獨活に芽の如く赤く見事なり。よくのびて秋に至りて凡一丈餘に至る。蝦夷地に至りても。竹木に代て藩籬にはくる。まゝ其嫩き時此莖をとりて喰ふ。其味酸くして淡し。故に酸杖の名なり。又此葉茎とりて。濕瘡に膿汁を出せもにを。おほひふたせるによし。惡水を吸出せいふ。蝦夷も此實をとり貯て。魚油に和し煮て喰ふ。中略

東夷物産誌に　トクンス

松前人アメマス。クストルとも云ふ。土人夏月常に食せ。

同書に　アンラクル

此百合に屬して。紫黑花を開物なり。此も此白老に殊に多し。夷人採て糧となせ。直に煮食し。或も淪し糸に貫き乾貯ふ。

蝦夷草木志料に　ケコモ

一名トマ延胡索。（本草綱目）定りなる和名なし。その葉牡丹に似たるもの竹葉に似たるもまさあり。夷人其根を淪ぎ日乾して。食料に備ふといへど味淡。

今舶來の物に似せ。蓋し藥にも堪へじ。

同書に　フクシヤ

一名ヤマビルハビル（註略）茗荑。夷人此根を搗て餅となし。糧に備ふといふ。

但東夷物産誌に。フクシヤ茗荑なり。又ホクサト云。山野所〻多くあり。胡荑と同じく搗交へて餅となし貯ふ。又蝦夷物産誌上巻に。茗荑俗にいふニンニク。此草所〻に多し。夷人等其根を掘取まて。他物に雜へ食ふ。

東夷物産誌に　シクツ

夷人ネギと云ふ。即胡葱なり。夏月夷人根葉を連孫堀取て細刻し乾し。臼にて搗き餅となし晒乾貯ふ。以て冬節に糧となり。

東夷周覽稿上巻に　山葫

夷人採て食料となす。又刻み乾し寒中に食料とす。甚だ臭氣あり。山ニンニクといふ。

東夷物産誌に　シイチシホヤイ

一名イマキナ。土人莖を折て生食す。其味微甘なるゆゑに。又呼てアマニウとなす。狀鹹草に似て夏花開秋實ゆる。其子小茴香に似て大なり。吾師潘西園公云。此舶來に羌活に異ならず。夷人又常に取て生食し。或ハ皮を剥割て乾貯ふ云々。

同書に　タモキケシホヤイ

一名イカサネクツといふ。此羌活に一種にして。狀白芷に似て。莖紫色其葉莖節々自ら分て。四折をなす。それ形アマニウに類して細長なり。此ハ夷人間々食用とす。

同書に　サク

一名ビツト。此羌活に類にして。シヽウドと云ものに近し云々。夷人ハ希に食ス。

同書ニ　イチヤリキナ

一名シヤク。夷人食料ニ用ヒテ云。中略狀モ獨活及土當歸ナドノ倫ニ似たり。花モ蛇狀ニ似たりといふ。チエツホウシニ同りしモ葉本ハたぐひニして莖硬く微香同り。食モるニ堪へ。

同書ニ　キイテン

一名トコロ。字鏡の按ニ順云。俗用野老二字。夷人根を採食料とナ

ルといふ。一種オニトコロ同り即出苾蘚藥性火金

同書ニ　ムケカシ

一名トヽキ。多識篇按ニ。東醫寶鑑沙參ハ下ニ。諺文同り。音トヽク。因ておもふニいしヽいふトヽキモ。蓋朝鮮の名なるべし。クキモ通音なり。此外トヽキといふ草おほし。沙參本草夷人此根を食料とナルといふ。まさトウフイハ産ニ。ムケカシ同り。一重ヒトヘラキ草藻草鹽即桔梗本草まさ廣尾ニムケカシ有。此龍腦草。即水蘓本草まさ山蘭。本草蘭の注モ同名なり。

同書ニ　トツフ

一名スヽカ。万葉集篤ハクマザヽ葉隈同り故字を用ふニ名とせり箸本經逢原夷人其實をカムイアマヽといひて。食料ニ充つ云々。

同書ヨ　イチリキナ

春末苗茂布く。狀蛇床ヨ似て甚肥大。微き香氣あり。春夏の間。夷人常ヨ食ひ。

同書ヨ　ベツクツ

松前及仙臺ホウ菜といひ。アヽハクワシタイ菜といふ。高六七尺葉ハ大尺餘。夷人希ヨ食せる者あり。

同書ヨ　ベヌ

此救荒本草の牛皮消なり。夷人根を堀テ炙り食ひ。

同書ヨ　エント

此千屈菜なり。十勝オコツナイハ間。水邊ヨ多くあり。吾邦ヨテモミソハギといふなり。夷人苗を採テ淪し食ひ。

同書ヨ　チシユヱ

白芷ハ一種なり。夷人採て食用とす。

同書ヨ　シヤク

夷名キナといふ。松前方言ヨテシヤクといふ。此草ハ生根を食ふ。又其莖根を取り。夏分より其皮を剥て干し上げ。冬中ハ飯料ヨ充。食せる時ハ細刻して鯡子を入れ。青白色なる土ハ汁を入れ。苦味を去る

といふ。

同書ニ　キト

此ハキナニ似たる草ニて。刈み干し上げて。夷人等冬分ニ食料ニ充ちるもノなり。食法モ又キナ同様なり。

同書ニ　アイバカマ

夷名ブクサ。蕈草類ニて夷人食物とす。

同書ニ　アンラコロ

此草の根ハ圓ニして。外ニ大豆ニ如く疑族圓ニして其中ニ小粒有り。夷人食物とちるもノニして。味百合ニ根の如し。アンラコロハ夷名ニして和名ハれぜ。

同書ニ　ツキサニカルシ

此榆内なり。ツキサニハ前ニ出せり。カルシハ菌蕈木耳の總稱なり。味極て脆美。蕈中ニ最上とす。

同書ニ　ワカヲイ

秋ニ末ブナの木ニ生ちる菌ホり。形色稍シメジニ類して。只其柄かハよりニ付て皮ホそし。其皮を剥ぎ煎食ちるゆゑニ。仙臺ニムキタケといふ。

同書ニ　ホレンリユム

一名フクシャなりヤマビル。ハビル。今行者葫。禪場葫。天台蒜などいふ。此俗中此濫名なり。此も此蒜葱此類よして。臭氣少きゆゑよ。神人僧侶も食ひれる。故よかくいふといへ。まゝ下野國日光山中よて也。僧侶の食料よせしといへることゝ所りたと一常食よならぶとも。古法よ所らぎ。按よいよしへゝ神佛二家共よ五辛此内よ此物を入て食せる事を禁ぜしゝ。既よ本朝令よ見えたり。但茗葱本草夷人此根を搗て餅となし。糧よ備ふといふ。千島志料

石狩字アシタラマ此邊よゝ。胡荽草ミヤマスミレ早鵜カタクリ

等多し。まゝ姫石楠花ヒメシャナギ一面よ雪間より生長たり。土人これを茶の代よ煎して飲めり。香氣甚ぞ佳なり。石狩日誌

松前志よ　ニキウ

本名未詳。是方俗の稱なり。葡萄此如く蔓延して其葉梨よ似たり。夷地深山大木所り柱とゝべし。實をコクワといふ。秋熟ゝ土俗これを食ふ味ひ甘酸也。和名鈔よ獼猴桃をシラクチと訓ぞ。此物なるべし。又貝原氏の大和本草よゝニカキラス。是をコクワと云乎。

蝦夷志拾遺ヨ　新羅松（エビタツカラマツ）　胡桃（クルミ）　栗（ナムラ）

此三種の實を夷人好て喰ふ。

蝦夷秘鑑ヨ

蝦夷地ヨ樺といふ樹あり。此木を生木ヒまゝ皮へ横ヨ切疵を付きバ。即漆ヒごとく液汁出るを取てこれを飲む。是土人ヒなき處なり云〻。千島志料

○椎茸の事

蝦夷地ヒ山中。ナラカシヒ木の枯たるより生じたる椎茸を。アイヽ共取ヨて出キよし。夏四月頃取たるヨ肉厚く味ひもよし。秋取たるヨ肉薄く味ひもまゝ薄きといふ。此外ヨ如此自然産なる物なきよしなり。松前秘説

○蝦夷呑湯ヒ事

夕張字タッコフといふ所の夷家ヒ傍ヨ。眉豆（ゲイン）　粟（ムンシワ）　稗（ヒヱハ）　小豆　蘿蔔　箭芋　白胡瓜　南瓜等多く作り。まゝ傍ヨ香薷を植たり。飯を炊て後湯ヨ入香を出し飲ためヨ植置とぞ。此香薷なき時ヨ五針松。姫石楠花を入るよしなり。夕張日誌

○鹿骨より肉を得る事　附班杖根天南星ヒ事

夕張字タイケシといふ所の土人等。鹿ヒ足骨を煮七

八本づゝ。銘〻盆に盛て出せ。是を喰残見るに其骨を破り中より一條の肉を取て食ふ。其味至て甘美なり。余も是を乞て喰ふ。其骨も冬分干貯て來客の爲に備ふとぞ。又カマバと云所に人家五軒有り。爰にて余ゞ爲班杖根天南星を取來り燒。是は土人の芋なりと云出せに頗る美味なり。たゞし是を和人も毒なりとて喰ざる由を語りれば。心の堅き所だに喰ふべし少しも毒ハなしと教へし故。余七ツ八ツを畫食ふせしに。何の障りもなかりしかり。有毒草木圖說中に收ある也。恐くは心に毒有る事と迄は未ゞ研窮せざりしなり。毒も心のみとだに成らば。頗る救荒にも成べき物なり。同上

○寄鯨の事

蝦夷地の海面に鯨夥敷見掛しなり。然るに夷人カムイと號し漁事なし。カシチリと云魚有りて鯨を切といふ。亦鯱に突き或は春分氷に當て疵を請濱邊へ折〻流寄ることあり。夷人悉くよろこび舟を出し引寄て。是を切とり食物にして煮て喰ふ。産物にも出せ。右鯨の油に限らず。魚油も何にても夷人是を食せ。仍てトヾといふ魚の餌袋。或は鮫の餌袋へ油を入て圍

置まさい交易ゟ持來し時油を明し袋へ直ゟ酒を入て持歸る本邦ゟ心ゟて太甚氣味惡事なれども左ゟならば都てきたゝき事をもらぜ日〻食事ゟ椀の外も洗ふ事ゝし扨澤山なる鯨故其業ゟなれたる人幾渡し獵具をゝしらへとりたらんゟそいと安きゆゑゟ皆人おもへども大漁の事容易なるまじ若又夷人もとり覺えなば莫大の産物益なるべし蝦夷土産十勝濱より鯨の義委敷相認可申上旨奉承知候右ゟ全く斃候鯨ゟて於東洋春分氷ゟ擲き斃候事ゟ由申習候鷗等沖合ゟ群候樣子抔先ゟ目當ゟ仕見出し候

義ゟ御座候一體鯨ゟ義ゟ蝦夷人共至て相好候間見掛候得者毒箭抔射懸候へ共壯健なる鯨ゟ中〻捕候義仕得不申候ゟ付寄鯨等有之候節ゟ蝦夷人共殊の外歡び相祝候義ゟ御座候則御書取奉返上候以上未十二月休明光記附録

北夷談卷一ゟ

ビバセといふ所漁場ゟして土人家三戸ゟり仁三郎小屋ゟ止宿ゟ夜ゟ入て此處の乙名マタンカシイ來り通詞七郎兵衛を以て申出るゟ今晩我ゞ處ゟ止宿の祝ゟして此品を獻し申度ゟしゟて持參

せしを見るに寄鯨を細くさき干立しもれまてかゝきおと石れ如く中〻齒もおよびがゝし生きし食して一禮述て通詞に尋ねへば尊き人又珍客等なる時ゝ右様の干魚など出してもてなせゝ夷人れ風義と答ふ。

東夷物産誌に　フンベ

海鰌なり。十勝れ海殊に多し。磯近き處にてゝ六ッ七つおなのりまり游泳せるを見る夷人殺せことを得ぜ。偶自ら死を取食ひ。

同書に　トクシス

エ山ヒンネシリ　マツネシリ間イヘウシビッといふに産せ。土人夏月此魚を取て食料とな生故にイヘウシれ名なり。イヘウシとゝ物多きをいふなり カハルチエッホ形扁にして鯽魚に似たり長六七寸餘殊に美なり多く食せ毒で瘡を生ぜメイコ其狀頗る不典尤大者四寸餘背に甲なりて拾枚屬〻相疊める事魚鱗れごとし。まゝ炙食して味鰒に似てやゝ劣る。千島志料

○キナボウ魚れ事

キナボウといふ魚なり腹内に油ゝ有て蝦夷人れ珍味とせる處なり夷人ども肉を取てしなとへイナ

ヲといひて。夷人は幣を入きて放つゝ。再びとりし時
は。彼幣のある事をまゝ〳〵ありといふ。イナヲといふを
則稲穂よして。本邦の削掛といふ幣ありといへり。
實は其遺風なるべし。北海隨筆

東夷物産誌は。キナホといふ魚あり。此はいふウキ、
なり。濱西園公魚譜引坤輿圖說曰。翻車魚蓋是なるべ
し。夷人其筋を取り淪ヒタし乾し食は。又其脂を採て飯は
そゝぎ食ひ。千島志料

○ウルツフ魚の事

擇捉近海は。ウルツフと稱はる魚あり。鮭の如くして。
少しく小さし。根室邊ふて紅鱒と云ふひとしく。身の
赤き事紅の如し。土人好て炙食はる夷諺俗話

○イスンベイベ魚は事

イスンベイベといふ魚は。形角はてかしらはさより
は似て。身はき通り鱗なく。色は鼠色はて擇捉といふ
所は夷は是を喰ふ。トウブッといふ所はは有。此處は
夷は喰ふ夷諺俗話

○ムイ貝は事

東地下手はは。鮑一向居ざる由なり。又鮑は似たるム
イと云貝あり。日本人は食せざれど。アイノは喰ふ

よし松前秘書

○ルイベの事

十勝上川村くれ人家を廻る。處々よてルイベと云て。鮭れ生ち雪よ漬置しを切てルサ茅盆よ盛ま。マキリ小カリと柳の枝一本よ鹽を一撮添て出ま。其譯ゑ生よて喰得ざる人ゑマキリよて串を削ま。是よ刺し火よ炙ま喰べしといふ事れよし。又一種コサ薄の一種唐華草と云草の根を煮て出し。おゑ午皮消を燒て出ま也有。十勝日誌

○干數子れ事

ナヨロよ逗留して。ヤエンフルアイノれ家よ行しよ。年頃四十以上のメノコ三人居たましぞ。かゑそらよ寄ま て何やら噛み碎き器よ溜め。ゆ〜暫くして夷椀よ入ま。傳十郎よ差出し食ま べしといふ。是ち見るよ干數れ子ち噛碎き。魚油をかけしもれなり。最前より老婦ども寄合。堅きを噛み碎きて。傳十郎よ與へし事真實なり。ちゑまども眼前見請し事ゆゑ。食しがゑく一禮述て立出る。ま べて此邊れ夷人風俗ゑ。地方夷よ替ることなしといへども。一體の所業大ひよ替る事多し。松田氏四六筆記

○食土の事

シヤナアよりも北方海濱より四五十里許りを隔て。ショッチキヤと云所あり。此處より蝦夷人食物とする土あり。色白く和らかにして餅に如し。食料にせんと思ふ時は。先つ水に溶解攪拌して。砂を去りて煮るに生麩に其の如し。味ひ平淡にして毒なし。土人殊に賞美する物なり。蝦夷草紙

知床字チエトイウシに喰土あり。土人草根を食する時。此土を少し入るゝや。草根の毒にあたらざるよし。是を採るに鳥獸の喰て居るを見て。それを試とし てとるなり。別て鹿を好みて喰ふよしなり。是有涯土色黄色。群鳥飛來啄咀所食。常陸風土記 とする物なり。知床日誌

○唐太飲食に事

一飲食に事大抵蝦夷島に異なるにとなし。只其草根を貯ふることを夥し。海獸に油を食するにと甚し。是に異とす。

一獸肉にして食する物

トド　水豹（トカリ）

犬（セタ）　狐（キツネ）

獺（チヤマニ）

ホイヌ

トナカイ　リキンカモイ

一魚肉ヨシテ食セル物

鮭　鱒

鯡　ハチユツチヱツフ

アルコイ　其他雜魚

一草根ヨシテ食セル物

キトー　ハツプ

イレラウ　トマ

シトリキナ　イチラボ

ウニシコ　チマキナ

イケマ　イカノカイ

ライベウシ一名モシカルヘ　ホメシユ一名オタクル

チンラタ一名ルーエキナ　トレツプ一名チト

ビンキナ　イテレタラ

フーウレツフ一名カタム　アンネカ

ウネハム　チリケン

シラクチ　ハビドン

イマウリ　チクイラ

カツ、フ　シヤククトレツプ

チユックトレツプ

一木實ヨシテ食セル物

シケレベニ　二セウ

大抵草根の食とすべきものは。悉く春夏秋の間に取來て乾曝し。倉中に藏して冬月に貯をなす。皆女夷は為る所なり。

一草根木實の如きも。寫生して其形を得さるにあらざれば用をなさゞる。故に圖を出だすことを得ば。

一煮熟は法大抵水煮は物多し。其鹽味を用る物なる時も。大に淡薄にして。濃鹹の物を忌む。

一大抵は食物。海獸油をそゝぎて是を喰ふ。其故をとふに。諸草は内或も毒物なりて。腹痛する事なり。獸油をそゝぎて喰ふ時も。絶て其事なしと云。故に獸油も本邦は醤油はおやくなして。一日もなくんば有べからず。

一夏月中不獵は時も。冬月に至て獸油盡ることなり。其時も斧小刀其他何によらず。古釘破鍋は類を持て犬を引つゝ。奥地異俗は夷地に入て獸油を交易し。トゞ獸は腸（平生貯置て盛油は器とす）に盛て艙に積み。犬をして是を挽しめ。積雪劇寒をはゝて歸り來ると云。是一日もなくるべからざる物なれバなり。（北蝦夷圖說）

唐太番人夷人ハ贈ヲシとて。トマを煮て余等を饗せヲ。トマを延胡索ハ夷名ヨて。味甘く水氣ハるものなり。砂糖を和して食ふ頗る奇なり。夷人ヲこ遠ハ飯料となさよし。觀國録

○寒防ヨ煙草を吸の事

天鹽字アヘシナイを。夷地第一の困窮所ヨて。余ゲ土産ヨ煙草一把ヅヽ遣さしさるや。其悅び限なし。此所ハ者を。煙草計を吸難々れバ。欵冬ハ嫩芽を接一吸ヨし話々るヨ附て。扨左程ヨ不自由なるヨ。何故吸やと問しらバ。我こゲ吸を敢て好事ヨて吸ヨならば。寒を防ぐの一助と云しゲ然らん。煙草ハ出閩中ニ。邊土人寒疾ニ非此ニ不治ス。關外至リ以一馬易一觔ニ。崇禎中下令禁之。民間私種者ハ問徒ニ。利重ク法輕ク。民冒禁如故。尋下令犯者皆斬。然不久。因軍中病寒不治。遂弛其禁。蚓菴瑣語　天鹽日誌

○滿州人煙草を好む事

滿州の人甚莨をたしみて。葉莖を勿論脂ヨいさる迄。そつる事なく貯置て用る事なり。脂を草葉ヨぬりて。莨ヨのへて用ふ。まさ煙管ハラウをたくさ一置。細ラヨきげみ草ヨまぜて呑とぞ。其煙草を愛ス事これヨて去るべし。窮髮紀譚

○飲水の事

後志國にある山中に雪水には。苦味ある樣に覺ゆる故。土人に問しらば。是を椴蝦夷松等にある山に水なれば。苦味にるあり。樺胡桃椒樹等にある山に水も。甘美なりと。如何にも左樣に思えるゝ。椴松に山の水何となく煤竹色にて。見てさへも少し異る物なり。土人等は能く如此事まで。窮理せし者にて。此事のみならば。余も種〻土人に考へて。益を得さる事にるなり。後方羊蹄日誌

ウルップ嶋に北方にチリホイと云嶋にり。此嶋に岩の間より湧出る泉にり。味ひ酒に如し。旬好き梨子に如し。此島に行たる蝦夷土人。此水の濃味なる事を甘んして。其處を去り兼て數月を滯留して。是我飲滿腹して飽ぎと云り。ひさと飲共無毒にして。亦醉ふ事もなし。土人是を名付てカモイワスと云。神水と云事なり。亦赤人も賞翫して甚尊ふさいへり。遍く天下万邦にも。かゝる妙泉も亦類にるまじと云へり。則赤人尊信してキスロヲタと名付く。日本に養老水と云義のもさらば。予此地に至らざれば委細さらば。其水の味ひと旨ひとを尋るに。蝦夷地に樺と云樹にり。此木生

木はまゝ。皮へ横切疵を付れば。則漆は如く液汁出るを取て是残飲む。是土人のなを所よて其木は液汁ゑ。彼嶋は水は匂ひよ似さるといつり。よつて其樺木は液汁を土人よ命して取ア。試るよよき梨子の白ひのりて甘し。又東都は酒よ似たると思そる。因て彼島は水は味ひを思ひゆりて。推量せし處なり。蝦夷草紙

○蕗葉等よて飯を焚事

宗谷海鼠引漁よ集ヲたる夷は内。六月は事なアしゞ。五六人會合。山奥へ飯糧用意のため。フイといふ草を取よ行しゞ。其内一人見失ひ。五日目よて漸たづ彷當

たり。當人よたづ彷し處えのらぜ道よ蹈迷ひ。いろ〳〵なせども。元の道へ出ぜ。深山よまよひ居たるよし。其時飯糧ゑ持さぜ着さるまゝよて。マキリ一本持たるぞらうよてい。こゞして飢をゑのぎ居たるやと聞紀したるよ。山中よたのる處は木の中。生よて喰るゝものゑ生よて喰し。煎て食ぜるもはゑ。木は皮よて鍋をつくり。其仕方ハ夷の水や酒を持運ぶニッシといふもは〳〵如くあしらへ。是よて煎て喰ふ。火打なき時ゑ。よく乾きたる木を先を丸く削ア。板残臺よして臺へも丸く穴を窪め。其所を錐を以て揉む如く。手を真直よ

して。曲らぬゆうよ間斷なくさるときそ。その出き屑
段〻溜り。次第よ其屑色付時。精を出し摺ときそ黒く
なり。それより火出るなり。まさ蝦夷地の蕗そ。至て大
きく葉は廣さ傘の如く。その蕗は葉五六枚かさ重て
縅ひ合せ。是よて飯をも焚なり。又煎海鼠拵よも大鍋
もたざる夷そ桶へ海鼠を入尤一盃よいき。石を燒て
其桶の中へいる〻時そ。次第よ海鼠は腹中より水出
るなり。おひ〻燒たる石を取替入て。煎海鼠をきしら
へ上るなり。人道いまざひらそ出。不自由勝なる事な
れども。天人をころさぼ。自然とそき〻よ。工夫を思ひ

付。事は用辨出るもの智と造化のこのらしむる所な
り。夷諺俗話

往昔鐵器無之節。魚肉は烹る穴を堀て。蕗は葉其季節
有合は草葉を敷き。物を入き又草葉を覆ひ。燒き石を
幾度も入換。半烹よなきと云。湯ハ蕗或ハ虎杖は葉へ
水を入き。火を焚沸湯とし。蝦夷雜書
有珠字タッコフナイと云所よ宿るよ。鍋を忘れ如
何共なし難く。予樺鍋は作らんとて。樺を探せどもな
き故。甚是を思ひ煩ひしよ。土人程なく欵冬の葉を取
來り五六枚重ね。是よ程よく米と水は入て括り。火上

に置しが。頓て其葉を燃仕舞と思ふ頃に取上見れば。中に握る如く丸く飯に成さり。實に奇とせべし。東蝦夷日誌

○葉椀の事

笘前の土人。厚朴此葉もて笘様の物を作る。是に物を盛て出しぬ。其作り方頗る面白し。二ツ三ツ持歸りて人に示せば。是ぞ葉手和名抄祭器具ヒラテ式葉手漢語延喜式葉椀柏十五把。牧手十六枚料類聚三代格葉盤柏葉釋日本記等此遺風と。總て此山中何ぢにても。木此葉に食料を盛て。土人等も喰れる。天鹽日誌

○藥餌

○醫藥の事

最忌疫痘。或病之者。雖人子兄弟之親。棄而不顧。醫無調劑方。皆獨用。大抵用熊膽月福利過一計麻。又好用蕃椒。故賈舶多齎之。或就所在監吏譯人求丸散者。故事必取證劵。而後授之。即瞑眩至或變。故不得怨。所授人。蝦夷有誤觸伏機中毒失者。登時以屠刀剔其肉寸許。海水洗之令毒不它侵及。蝦夷風土記

十勝字ベツバラ此土人イソラムの家に宿せるに。其隣なるヤエケマツと云婆。久敷病氣此由にて。女子共

多く見舞ふ集またり。其中ふ一人の婆有り。是ハ我ハシルウタレと云て。此地の巫醫なり。病者ハ何れも總て神ふ祈ま。又藥等を差圖せるよし。其祈禱と云は。病者の枕元ふ小席を敷。太刀短刀鍔矢筒等を鍔ま。イナヲを立て。山海ハ神ふ祈ま。何も迚ハ方より。何草を摘て用ひよ。又全快の有無等を示せ。本邦の巫ふ異なる事なし。又奥地ふても待人の遲速。走ま人ハ方位を指。其餘種〻ハ奇なる事等を行ふ事有。ソウヤ邊ふても。是我シノチと云なり。其藥品の一二を記せふ。風邪ふも石防風を刻み煙草ふ雜へ吸ひ。眼病ふも紫苑を水ふ浸して附。産後血ハ道ふも沙參。まゝ山篇豆。玫瑰。まゝ是を小兒の口中の瘡ふ用ひ。瘡ふも竹節人蔘。胸ハ痛むふ山芍藥。腫物ハ吸出しふ舞鶴草を噛ふて浸し附てふし。癰毒ふハ佛甲草。胸骨ハ痛ふ金鶴脚。石長生腹痛ふハ邪蒿。寒邪を拂ふふ辛夷。まゝ白管沼草。鼻血ふ水楊梅。其外牛皮消トウマフ升麻キシキント細辛黄蘗龍葵種〻ハ採藥ふして。却て和風の藥を用る事を好まず。其功驗も却て其風土ふ適せるや。治せる者多しと語ま。十勝日誌

○藥草の事

松前志ニ　ニラ

韮土地ニ應じ甚茂生ス。我藩士工藤長舊ハいへる。西部夷地スツキ海岸嚴壁ニ韮ありまゝ西部美國といへる地ニもありとぞ。今考るニ路傍ニ生ずる雜草中ニ。韮ニ等しきもハありて。是亦茂生ス。是疑らくは。山韮ニして離れ實ならんか。藩中まゝ蒜なり。衄血妙藥なり。足裏ニぬるはくるニ衄血止て痛をさるべし。今本草ニよつて考るニ。葫ハニンニクハ本字ならんか。國人是を植るもの少(マレ)あり。又藩中アイハカマといふものあり。方言なり。山澤ニ生ず。惡臭甚し。夷人好て食ふ。キトといふ。又北狄露齊亞人食之。名てチエリムシャと云。疑らくハ是山蔥の類ニして。其土地ニよつて小異ありならんか。然ども白花ニハ非ず。極て淡紫なり。黑實を結ぶを和俗或ハ行者蒜と云もの即是か。或これを試むるニ。結毒ハ水腫ニ妙なりと云。又魚毒を解ス。五辛の一つなり。尤草阿魏とハ異なるべきか。阿魏も亦五辛ハ一つニして。興渠是なり。本草時珍ハ說ニよれば。草阿魏ハ西域ニ出るものなり。又本阿魏なり。蓋し阿魏とハ其汁を膏とせるハ目なるべし。

東海參譚ニ

蕪附子といふものの有。大毒草なり。葉水仙ニ似て細く溝ありて。花桔梗ハかゝちにして少さく。六七花聚着し色黄なり。莖ニ二股ハ葉有て。其中ニ花を生ず。人これを舐れば。忽ち吐血ス。夷人其根を採りて主とし。其外三五味我調し合せて。鏃ニ塗て毒矢とス。羆を獲るもの是此毒矢なりたれ〳〵夷人も得ざる處ありて。調ずる事一ならず。

蝦夷草木志料ニ　シコトカ

一名オラッ。共ニ昆布盛ハ土名なり。茅部の夷人ムネバといふ。此升麻ハ一種。大なるものなり。其根青色。乾けば則黑し。ゆゑニ俗是を青升麻と呼ぶ。夷人水煎服ス。又ホニアラカを治ずるといふ。ホニアラカ鳩尾。アラカヘ疼痛をいふ。即心痛を云なり。

同書ニ　ライタ

一名タイコン草。大根草龍牙草閩書南産誌　夷人此葉我とりて。金瘡ニ傅といふ。松前の俗ニ。其根を用ひて。腹痛を治ずといふ。

東夷物産誌ニ　龍牙

處〻原野ニ産ず。此龍牙草なり。松前の俗ダッコビ

草といふ。樵夫深く山に入り腹痛のときハ。此根を嚙て即治せといふ。夷人ハ其葉を揉て金瘡に傳るといふ。千嶋志料

○カウリヽ鳥并藥草の事

知床字テシレト岬に石門有。傍に岩洞多し。其中にカウリヽといへる鳥有。水に游ぶ事小鴨に如く。此洞中に窠あり。此鳥を土人ハ。血の道に藥なりと云傳へし。おゝ同海岸に剪股白蒿多し。土人是を腹痛に時煎じ用ふ。又知床に猶蘭朱蘭紫蘭等咲こり。土人ハ此紫蘭の根を以て。漆器磁器に破れを繼ぐに。能附ものなり。イマキコトクとそ。喰に齒に附と云義なり。又獼猴桃を松前にてコクワと云。土人渴せる時此枝を切。其水を吸ふ。甚甘く能く水腫を治せ。蝦夷國にて甚多き物なり。是續斷藤。山行渴則斷取汁飲之號曰東風菜太平寰宇記。廣州信安縣條。おゝ含水藤本草綱目涼口藤廣東新語諸藤齊民要術水藤同物ゝ。木に筋通し。切口を吹に數丈に先に息通せ。土人此枝を水に晒たるを以て。火を附るに用ふ。知床日誌。タ張日誌同

○蜊蛄の事

天鹽字フリレヽマ邊に。蜊蛄多りしの。土人是を見る

や味噌を一撮其流れに投せしや小石の間より數十足出て其味噌を喰に群集るを取て玉有は玉を取り無きも串刺にし炙食せるに其味實に美なり其味噌に群來る事又不思議と云べし此玉蠻名オクリカンキリとて水腫の藥なりと此地水腫病多きよりして此蟹多し又其能も他に比せる時も尤も上品なりと總て其病有地に用ふ其を治せるの藥品我生せる事造物主は然らしむる所なりとは則是獸畜は鮓答（ヲサヲ）にして佛家にていへる舍利なるうと思いるなり箱館松前にて此蟹を後方へ退去ゆえサリガニともいふ

ふまゝ舍利有るもの多きより舍利蟹といふ共云り

天鹽日誌

因に曰く鮓答生走獸及牛馬諸畜肝膽之間中略小者如粟如榛其狀白色似石非石似骨非骨本草綱目十勝日誌

○カモイハシユイの事

納紗布字オンネコタン此邊に長三四尺位にて色灰白は蛇の如くまゝ魚は髭の如き物有問にカモイハシユイと云手にて皮を剥に白くして內地にて見る越王餘算本草綱目なる須臾は間に堅成て木の如し土人の話しに是も岩に生る物なりと沙箸生干海岸春吐

苗其心若骨。白而且勁。可爲酒籌。凡欲採者。輕歩向前。及手按之。不然聞行者聲。遽入沙中。堀尋之終不可得也（嶺表録異）

とあるも。是あるべくれども。沙中より入物よりならば。是を亡羊山本先生百品考中より。沙箸（嶺表録異）越王竹（南方草木状）越王筋竹（竹譜詳録）沙筋（福建通志）塗釵（同）等の名を擧られたり。實より博識と云べし。是此地所より産るより。始て岩より生たるを見さり。揺〻とし波より漂ひ。堅物よりならば。沙筋魚の名有も宜なるらふ。松前より此箸を用ふれば毒消よりなり。まさ簪よりして刺さや。頭痛を治さとも（納紗布日誌）

○トケ魚の事

宗谷場所の内。トマリのウエンベツといふ小川より。丈け二三寸の小魚よりて。背より三本兩脇の下より一本〻。都合五本。木綿針の如き。尖さるトケの有魚なり。（蝦夷人より尋ねしより。アイウシチエツフといふ魚よりて。まさロコともいふよし。此魚も胸支たる時この魚を燒て煎じ。その湯を夷人用ふるより即功なりとなり。和語本草を考ふるより。鰈魚和名トケ魚といふなり。血滯崩血より用ひて能ある趣なり。則この魚の事なり。松前のもの。人道ひらんば。書をよむ事なども無論。醫の道

も尚なきことなれども。自然とその功能を知り。藥力を考へ知てるも。天はたのらしむる所ゑて。實ゑ妙ならぜや。夷諺俗語

○鮭の脊腸は事

鮭魚は背中ゑ紫色の腸なり。醢となし美食は上ゑ。食て胸隔を開く。奇味なるもはと也云〻。千島志料

○夏坊主の事

濱益邊ゑ夏坊主と云木なり。是も毒草はよし。夏も葉ゞ落る故號るゝ。土人こは木を煎て。其汁を括鎗ゑ塗ず。海馬獵ゑ用るゑ。如何計大なる海馬も。一本ゑて斃ざる事なしと。西蝦夷日誌

○製毒の事

合春烏頭烟液以津液調之。傳諸矢鏃及鎗鋒。蝦夷各有一家法。皆秘不相傳。或加用蜘蛛蕃椒者亦有之。已製而挾之膝間。以試毒緩急。或置之舌上。毒之峻者。舌軋龜析。則以刀剥去。必試之已身而後用之。則雖羆熊之猛。一中莫不殪者。蝦夷風土記

毒といふも。附子と蜘蛛と唐辛子は三品なりといふ。其量目を語る事なし。此毒を去るゑも。ふんゑくを摺すてはくれば。忽消るといへ。或人曰。夷人の毒を調

合せるを。余處なぞら見しことなりしが。附子は根を大として。足高蜘蛛と蜂虫煙草などをも合せしなり。今一二種も有しゝども。近く見ざれバ何品とも辨へざりしやいへ。北海隨筆

蝦夷風俗彙纂前編卷八終